

2007年1月19日 発行

日本NIE学会会報 第5号

日本NIE学会事務局

〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-2

国立大学法人横浜国立大学教育人間科学部

影山清四郎研究室内

TEL/FAX 045-339-3433

E-mail kseishiro@edhs.ynu.ac.jp

NIE学会第三回大会が横浜で開催されました

去る11月18日(土)、19日(日)の両日にわたって、日本NIE学会の第三回大会が、横浜市の横浜国立大学キャンパスで開催されました。

今回は二日間の開催となり、また日本の新聞の発祥地である横浜での開催ということもあり、全国各地からNIEの実践や研究に関心をもつ教育関係者や大学関係者、報道関係者など合わせて230人を超える参加者がありました。

18日午後からの総会では、平成17年度会計報告と平成18年度事業計画案と予算案、そして来年度おこなわれる理事・幹事選挙の規定細則が審議の後、承認されました。また来年の第四回大会は、広島大学において11月中旬の土曜・日曜の二日間の日程で開催される予定であることが報告されました。引き続き、ニューヨーク・タイムズ東京支局長のオオシ氏による講演、そして二会場での課題研究発表がおこなわれました。

19日は朝から、六会場に分かれての自由研究発表と全体でのシンポジウムがおこなわれ、昼すぎに大会は盛況のうちに終了しました。

それぞれの会場の様子については以下で報告させていただきますが、大会全体を通じて、これまでNIE学会の課題とされてきた「学会の独自性はどこにあるのか」に対する答えが、何となく見えてきたのではないかと感じられる有意義な大会であったと思います。

大会にご参加いただきました会員の皆様にお礼申し上げますとともに、会場校の横浜国立大学の皆様はじめ、当日の大会運営にご尽力いただいた方々に心より感謝申し上げます。

(運営委員会 平石隆敏)

各会場からの報告

「特派員の見た日本の新聞」

ニューヨーク・タイムズ東京支局長 ノリミツ・オオニシ氏

〔講演要旨〕 ニューヨーク・タイムズは国際ニュースを重視しており、40カ国に支局を置いている。日本の「いじめ問題」は、10数年前に、アメリカでも報じられた。ただ、教育問題というよりも、社会問題として取り上げられた。アメリカでは、「いじめ」問題は聞かない。むしろ公立学校での暴力事件のほうが問題になっている。

アメリカでも若い世代は、あまり新聞を読んでいない。大手紙はここ10年ほど部数が減っており、ニューヨーク・タイムズもそのことを重大視している。しかし、ウェブ上でニューヨーク・タイムズの記事を読んでおり、将来はそんなに暗くない。問題は、ウェブ上のニュースをどのようにお金にしていけるかだ。

プリンストンの大学時代は、学生新聞部に属し、毎日、新聞を発行していた。取材や原稿の書き方は先輩に教わった。日本の大学に日刊新聞がないのを知って驚いた。アメリカの新聞社にはインターン制度があり、私も大学の2年生の夏休みに、ニュージャージー州の新聞社で働いた。インターンを通じて新聞社の仕事を実感できた。

ニューヨーク・タイムズに入る際には入社試験はなく、デトロイトの地元紙で書いていた記事を送り、面接を受けて採用された。以前から海外に行き、他の文化の人たちに出会いたいと思っていたので、アフリカで取材をすることができたのはよかった。

アメリカでも、日本と同様、取材の自由と個人のプライバシーの間で迷っている。かつてはニューヨークの新聞の数は多く、集団的過熱取材も激しくて、被害を与えることもあった。ただ、アメリカでは、取材する側の権利や取材の必然性が理解されている。社会によって、言論の自由とプライバシーのバランスが違うのだと思う。（司会 鷲見徹也）

課題研究

第1会場 「学校外に広がる新聞活用」

NIEの活動は単に学校教育のものだけでなく、新聞の特性を生かして家庭や地域社会でも活用されその活動は徐々に広がっている。今回は家庭・新聞社・学習塾の実践発表があった。

1 「学校と家庭が協力して取り組むファミリーフォーカス」

聖心女子学院初等科では4～6年生の社会科でNIEプログラムを取り入れている。家庭で行なうファミリーフォーカスは「五感でニュースのスケッチ」「ニュースキャスター」を軸として、調べた記事の事実や背景にあること、記者の思いなどを要約し感想を発表させている。家庭では学校の学習で興味・関心のある記事を話題として話し合い意見交流している。その結果、子供は「要約する力がつき自分の考えをまとめて発表できるようになった」と話し、父母は「家族で話し合い他人の意見を聞く訓練にもなった」と話している。ファミリーフォーカスにより社会に関心を持って調べる力、読解力、表現力、要約力が育ち、自己教育力やコミュニケーション能力の育成が培われ、また家庭の団樂の時間が多くなり、子供の成長が見とれる場にもなっている。

2 「MOTTAINAI」キャンペーンの発信

毎日新聞社は新聞は国内外のニュースを提供するだけでなく、社会の公器として公正な評論を発信する役も担っている一例を紹介した。ノーベル平和賞受賞者ワンガリ・マータイさんが提案した「MOTTAINAI」運動を環境面で企画し連載した。この企画趣旨に共感した読者が日常生活の見直を図り、更にこの動きが行政や企業を動かす社会運動にま

で広がり成果が上がっているとの報告があった。一つの連載した企画記事に共感した市民団体、企業、行政などと連携し地球市民活動として全国へ波紋を投げかけている。

3「学習塾におけるNIE」

一般的な学習塾は狭い範囲の進学・受験対策を志し、知識注入を主としているが「開倫塾」は、学校の授業を補い学力の向上をめざしたNIEの実践を試みている。実践は基礎学習の習熟を基本として、適切な記事を教材として読み・書きを中心とした学習トレーニング、スクラップを活用した意見・感想などのコメントを書く学習、更にキャリア教育の一貫として記者派遣を要請して「新聞の出来るまで」「新聞社の仕事」などの学習もカリキュラムに入れ学力向上に努めている。

指導に当たっては教職員がNIEの目的を理解し、新聞を教材化した指導・技術を研修し合い、教職員の資質の向上にも役立っている。学習の場でNIEを活用していることを塾生や保護者にも周知徹底していることが報告された。(司会 高辻清敏・谷田部玲生)

第2会場 「日本型NIEの理論化をめざして(1)」

研究委員会では、優れたNIE実践の分析と創造という理論化に向けての共同研究を進めているが、本課題研究は、その一環として、地方紙・全国紙におけるNIEの取り組み(新聞記事、NIEのページ、HP、ガイドブックやDVDの作成、セミナー、新聞コンクールなど)を新聞界における実践(生涯学習用の授業)ととらえ、その現状と課題、将来展望などを考察することをねらいとして企画された。具体的には、次の3つの問いに答えていくことである。

新聞社によって取り組まれているNIEの取り組みにはどのような特色があるのか。

なぜそのような特色が生まれるのか、その背後にある基本的な考え方は何か。

その考え方に基づけば、取り組みをどのように改善していくことが必要になるのか。

当日の課題研究では、神奈川新聞社の鎌田良一氏による神奈川新聞を事例にした地方紙におけるNIEの自己分析と、横須賀市立鴨居小学校の臼井淑子氏による神奈川新聞の紙面に見られる地方紙におけるNIEの課題と今後の発展の方向性の提案がなされた。また、読売新聞社の岡田誠太郎氏による全国紙や日本新聞教育文化財団NIE部の取り組みについての紹介と、福岡教育大学の豊嶋啓司氏による全国紙にみられる「NIEのページ」やウェブサイトなどの分析・評価が行われた。

4人の提案を受けて、フロアーからは次のような質問・意見が出された。「日本型とアメリカ型はどう違うのか、あまり日本型NIEに固執しないほうがよいのではないか」「NIEはどのような人間像を求めるのか、それに向けた目的・目標を明確にする必要があるのではないか」「新聞紙面そのものが授業だと考えるとすると、読者にわからないことをわからせるだけでなく、深く考える素材を提供するような紙面づくりが必要になるのではないか」

最後に、これらの質問・意見を受けて、提案者からはめざす人間像についての自身の考えとこれからのNIEへの期待が述べられた。

新聞社におけるNIEの理論化という観点で本課題研究の意義をまとめると、次の3点を指摘することができる。第1は、NIEのアイデンティティは新聞を活用することであり、そして新聞界と教育界が協力して教育課題にこたえていくことであるとすれば、学習材となる新聞そのものがより質的に高まる必要があることが提案されたことである。第2は、そのためには、NIE(教育に新聞を)と同時にEIN(新聞に教育を)が大切であり、そのことはNIEの取り組みを報道することや子ども用のやさしい記事を書くということではなく、社会の変化や課題の背景や本質を読み解く、質の高い熟考された紙面づくりがなされる必要がある点が共有化されたことである。そして第3は、それゆえにこそ、新聞社によるNIEの取り組みの分析とその理論化が求められており、その出発点が今日の課

題研究であったことが再確認されたことである。

(司会 小原友行)

自由研究発表

第1会場

第1分科会では、歴史的な研究についての発表が2本あったこともあり、多くの方の参加があった。

1「NIEの先駆者大村はま」 橋本暢夫(元鳴門教育大学)

大村はま先生の新聞を使った単元学習の根底にあったものは何かということについて質問があった。発表者のほうから、大村先生の実践は、方法ではなく、「一人一人を大事にする」「能力差は個人差の一つである」などの理念に裏付けられた指導があったとの説明があった。他に、大村先生の新聞を使った実践の元になるものとして、戦前にどのような実践が存在していたのかという質問があった。今回の橋本先生の提案資料は、大村はま先生の新聞を使った単元学習を知る上でも大変参考になるものであった。ところで、今回羽鳥知之氏が来場されていたこともあり、話をしていただいた。羽鳥氏は大村先生の国語教室での授業を受けたことから、新聞研究に取り組むようになり、十万点にも及ぶコレクションは「日本新聞博物館」の誕生に寄与したことは周知のことである。

2「戦後初期の新聞に関する学習」 稲井達也(東京都立小石川中等教育学校)

大村先生の実践は社会生活と切り結んだ実践ということから、PISA型「読解力」とNIEとの関連についての質問があった。発表者からは、生徒の実態から評価する力が不足しているので、新聞を使った学習に位置づけていくことの必要性についての説明があった。PISA型「読解力」が実生活の様々な場面で直面する課題に対応する力であることからすると、NIEの取り組みがPISA型「読解力」の育成についても有効であると考えられる。

3「全校で取り組む『国語力の向上』」 小泉佐保(大阪府高槻市立如是中学校)

実践提案ということで、指導の具体的場面をめぐっていくつかの質問があった。中でも新聞の資料の使い方について発表者から、新聞の資料の使い方として、一つのことを学級全体で取り上げる場合と、多くのものの中から個人に選ばせる場合とを組み合わせたい指導が必要であるとの説明があった。(司会 甲斐雄一郎・岩間正則)

第2会場

「新聞の報道写真を用いたデッサンWG

～B.エドワーズ著『脳の右側で描け』の理論をもとに～」 和泉真美

デッサン指導において、生徒には「苦手意識」「奥行き感覚のつかみ難さ」「3次元の空間から2次元の平面への置換の難しさ」などという意識の問題点がある。それは、「違うアングルから見ると、視覚情報と知識はたいてい一致しないのです」とB.エドワーズ氏が著書『脳の右側で描け』で述べていることでも分かる。そこで、新聞の報道写真を用いてデッサンワークに取り組んだ。新聞を使用する理由は、生徒の興味関心のある報道写真があり、フォルムの捉え方や構図、空間の感じなどを学ぶことができるからである。また、リアルタイムで内容を理解しながらデッサンを製作することにより、一層モチーフに対する愛着を感じながら描くことができるからである。

デッサンワークは、写真の上にピクチャーレインを重ねて背景とモチーフの外形をなぞり、塗り絵の要領でトーンを塗り分けて描き進めていくことで、見たままの形を写したデッサンが仕上がるという方法をとった。このようなデッサンワークを繰り返すことで、基礎的なデッサン力が修得できる。それによりデッサンに対する苦手意識や葛藤の克服ができ、気軽にデッサンやスケッチが描けるようになり自分の表現に自信をもつ効果がでて

くるといふ報告であった。

質疑では、リアルタイムの記事に対する意見交換をすることはなかったのかなど、新聞記事や報道写真への有効性などについてやりとりがなされた。

「メディアリテラシーを育成する NIE の開発」 植田恭子

本発表は、第2回日本 NIE 学会課題研究発表で提示された4つの視点、すなわち 情報の活用、比較読み、情報の発信、メディアとしての新聞、のうち、に焦点を当てたものである。

発表における考察の中心は、中学2年の選択国語「情報とわたしたち」における「情報の送り手体験」四つ、すなわち 1「俳句」、2「わたしは記者」、3「ひと欄を書く」、4「記者体験」のうち、「記者体験」であった。記者から取材の仕方を学ぶことから始めて、全部で14の段階を踏ませた実践である。中でも、ひともの記事である「夏色点描」の見出し分析が紹介された。送り手体験をしたことによって、送り手の視点の違いが自覚・意識化されたとの報告であった。質疑では、クリティカル・シンキングとの関連や評価方法の工夫・改善、学習者の到達レベルの設定方法など、今後の研究の展開にかかわるやりとりがなされた。
(司会 上谷順三郎・挽地一代)

第3会場

途中入れ替わりもあったが20名から30名の参加者で会場はにぎわった。全体的には現場教師による実践の目的とその方法の紹介がおこなわれ、また研究者が現場教師の実践から学ぶべき点を示してくれた感が強い。

発表を受け、質疑・応答がなされたが、質問内容などからこの会場の雰囲気をつかいがい知れる。現場教師が悩みつつも NIE に一定の目的を設定し、それをいかに現実化したかという点に質問は集中した。やはり、現場教師会員の多さがこのような会の雰囲気作りに一役かっていると思われる。

NIE 実践を通じ、地域住民との交流がなされた。

生徒が作り上げた新聞を直接届けるところに社会参加意識の高揚という大きな目的が含まれている。会話交流が市民性の育成の第一歩。

社会科における実践と総合的な学習の時間における実践の差異はどこにあるか。

実際は選択社会科がその役割を担ってしまっているのではないか。他の科目との横断的な要素は含まれていたのか疑問。

社会参加意識を高めるためにはどうすればよいのか。

まずは社会を知る。知れば意識は高まる。

他のメディアとのコラボレーションをどのように考えるか。

当然重要であるが、まず社会を広く知るためには多様な情報を掲載する新聞が出发点であると思う。

新聞作成作業そのものはどのような効果があったか。

作成することで、読み方に変化が起きた。レイアウトなどにも興味を持ち、作成側の意図を探ろうとする態度も出てきた。

全体的には、NIE が様々な教育活動の目的達成の助力となることが明示された発表内容であった。一方、実践の評価をどのような規準で、いつ、どこで、どのように行うかという点に関しては今後の課題として残されたと感じる。
(司会 下田好行・野津孝明)

第4会場

第4会場の三報告は現在の学校教育の抱えている課題にこたえる意欲的なものであった。

坂本幸仁会員は、勤務校での自身の実践報告をされた。氏は、不登校やいじめなどの問題に取り組みされている。氏の実践は、不登校の生徒・別室登校の生徒・学級にいる生徒と、それぞれに対して新聞記事を用いて、あるいは、新聞づくりなどで相互交流的に、不登校やいじめと各生徒自身との関係性を考えられるものである。NIEはその有効な手だてでの一つであることを主張された。コミュニケーションの問題、子ども自身へのケアや保護者へのケアについての質問がフロアから出された。

熊谷千砂都会員は、勤務校での生徒の新聞スクラップ等の分析に関する報告をされた。新聞スクラップ作業における、選択された記事と生徒のコメントを分析し、社会的事象に対する生徒の思考の道筋を明らかにしようとした。最後に、「逆接の接続詞」を使用させることによる多面的なものの見方・考え方の指導と記事選択の指導について説明された。生徒が選択した記事を報告者がどのように分析しているのか、生徒のいわゆる「紋切り型」コメントへの指導についての質問がフロアから出された。

後藤隆一会員は、現在の学校教育における「体験」の定義や意味の間違いを指摘され、教室における「体験」のためNIEの手だてを報告された。氏の主張された「体験」は、例えば、国語科授業では読む書くことであるとされ、そのことの重要性を強調された。そして、スクラップ・ブックそのものの有効性と限界を指摘され、新聞一紙面にわたる読み物の掲載とその活用を指摘された。氏の主張される「体験」と学習指導要領の「体験的な活動」との違いや関係性、学校教育と家庭教育の問題、より有効なスクラップ・ブックづくりのアイデアなどの質問がフロアから出された。(司会 鴛原進・本杉宏志)

第5会場

自由研究第5会場では、大学教育、高等学校教育における新聞活用の実践事例やその成果に関する報告が行われた。三氏の報告それぞれについて簡単に振り返ってみたい。

吉田信夫氏(金沢工業大学)による第一報告では、一年生を対象とした必修科目「技術者入門」における新聞活用とその成果が示された。社会における技術者の役割や責任を理解させるために開設されたこの科目の中で、社会に関心を持たせる方法として「週間レポート」の作成を課している。これは興味を持った政治・経済関係の記事を短い文章でまとめ、分からなかった時事用語を簡潔に説明するものである。これによって、学生の多くが社会の動きに関心を持つようになったという。

桐山聡氏(徳島大学)による第二報告では、創成学習開発センターでの一年生を対象にした若者の計画能力を育成するための新聞活用とその成果が示された。計画能力育成にあたって「目的」「目標」等の計画に必要な概念の把握力育成のため、新聞社説を活用しクイズ形式の演習を実施した。その結果、受講者の平均点の向上、特定の概念間の識別率向上が見られた。また、プロジェクト・マネジメントにおける計画の重要性を認識させることに新聞活用が有効であることが確認された。

北川保氏(セントヨゼフ女子学園高等学校)による第三報告では、教科書・新聞・ビデオの教材3点セットを用いた公民科「現代社会」における授業方法とその意義が示された。新聞とビデオが「現代」を学ぶのに最適な学習材であることが、「市場経済のしくみ」や「こんにちの消費者問題」の授業紹介を通して提示され、同時に中高教科書の差異や連関も併せて考慮すべきことが説かれた。また、NIEの教育現場での実践は、総合学習ではなく、教科における系統学習においてこそ定着をはかるべき、という示唆があった。

以上の報告はどれも興味深く、紹介された三氏の試みが広く大学・高校の授業実践に刺激を与え活かされることを期待したい。(司会 川崎操・片岡浩二)

第6会場

第6会場は、「NIEにおける教材化」を基調とした2本の自由研究発表が行われた。

まず、1件目は、相模女子大学理事、井上芳明氏による「新聞スクラップから教育の未来を考える」であり、前相模原市教育長といった教育行政のトップという立場を経験された方の貴重な提案であった。井上氏は、中学校教諭時代から新聞スクラップを実践されており、その膨大なスクラップの蓄積を、現在にいかに関用できるかといった視点で提案された。特に、小中学校校長（管理職）に対して、これまでの蓄積を関用できるような環境を設定し、そこで行われたNIE実践について紹介し、各学校現場において有効なスクラップ活用とは何かを学校長のアンケート結果を通して明らかにした。ここでは、新聞スクラップに代表される新聞情報の“蓄積”の意義、その“遡及性”が教育の未来に役立つといった点に注目が集まった。

2本目は、横浜国立大学大学院生、岡山三智子氏による「米国におけるNIE教材提供活動」についてであり、米国NAA財団などから入手した教材を綿密に分析し、そこにおける新聞業界から学校現場への教材提供の実態、その手法を紹介した。また、実際に今年7月に開催された全米NIE大会（Young Reader Conference）に出席し、その状況もあわせて報告された。岡山氏は、資料分析の結果から、教材化においては、その時々単元目標や内容に即していること、達成目標などが明確であること、そして何より子どもの目が生き生きすることが予測できる教材であることが重要と提案した。これは、現在、教員主導による日本型NIEにおいて、新聞業界と教育現場との連携について改めて見直す必要があることを提言したものと見える。そして何よりも、NIE研究において、実際に訪問して収集した他国のNIE教材などを分析するといった研究は希有であろう。

2本の発表に、会場からそれぞれの実践や調査の詳細についての質問があったが、これからのNIEにおける教材化の在り方についての方向性を示したものと見える。

（司会 坂根健二・中根淳一）

シンポジウム「リテラシーを育てるNIE 教育課程改革とNIE」

個人的な経験でしかないが、今まで、学会等のシンポに何回も参加してきたが、いまだかつて印象に残るシンポは少なかった。しかし、今回はシンポの企画と司会を務めたせいではなく、200名近くの多数の参加者とそれぞれ刺激的な提案と討論によって、活気あふれる印象深いシンポであったと思っている。神奈川新聞が11月24日付けで今回のシンポについて1面使って報道していただいたこともその印象を強くしている要因である。

シンポのテーマについて

今回のテーマを決定するに際して、企画委員会と常任理事会は、第一に、OECDのPISA調査結果をNIEはどのように受け止めるべきかを検討してきた。読解力の低下は狭い意味での「国語力の向上」の問題ではなく、表現内容（記事内容）の選択・解釈・意味付けを含んでいる。したがって、読解力の育成は教科の枠を超え、NIEによってこそ効果的にかつ実際的に実現できるのではないかと考えたのである。第二に、大会が開催される頃には教育課程改革の輪郭が明らかになり、その中でのNIEの存在根拠を解明したいと考えたからである。以上の二点から、テーマを設定したのである。

提案者と視点

シンポの提案者には、以下の視点からご提案をお願いすることにした。

有馬進一（藤沢市立大庭中学校） - 中学生に培いたい学び（リテラシー）とNIE
 府川源一郎（横浜国立大学） - 国語教育におけるリテラシーの育成と新聞の可能性
 生田孝至会員（新潟大学） - 多メディア時代におけるリテラシーと新聞

田中孝一氏（文部科学省） - 教育課程の改革とリテラシーの育成

司会は、阿部 昇（秋田大学）と影山清四郎（横浜国立大学）。

シンポを企画した責任上、上記の視点をつけさせていただいたが、活気あふれるシンポにするために、各提案者がこのテーマにかかわって最も言いたいことを提案してもらうことにした。だから、その成否の責は企画側にあることは言うまでもない。

討論について

提案を受けて討論では、リテラシーとメディアリテラシーの関係、教育課程改革の中でのNIEの居場所、各教科における新聞活用の差異と共通性が議論された。いずれも大きな問題であり、簡単に結論づけられないが、問題の所在を浮き彫りにできたのではないかと考えている。

実際の教育実践の中では、の課題が焦点であろうが、リテラシーという児童生徒の中に育成される能力を視野に入れると、既存の教科にリテラシーを細分化して散りばめることでは解決できない問題でもある。リテラシーの育成という観点からNIEをとらえなおした時、教科横断的に検討される必要があると思う。そのことが、の論点でもある。

だされた論点を深めるには至らなかったが、NIEに正対してみても各教科があいまいにしてきたことが見えてきたのではないかと思う。今回のシンポはこうした意味で、問題の所在を浮き彫りにできたと考えている。 （コーディネータ 阿部昇・影山清四郎）

日本NIE学会 平成18年度事業計画・予算

総会で承認された平成17年度収支報告と18年度事業計画・予算は以下のとおりです。

平成17年度収支報告（平成17年4月1日～18年3月31日）

貸 方				借 方	
項 目	予算案	摘 要	金額(円)	摘 要	金額(円)
会議費	270,000	常任理事会（5/15）お茶代	775	(収入の部) 会 費 法人会員 18社 × @50,000円	900,000
		常任理事会（5/15）交通費	63,000		
		常任理事会（9/11）お茶代	1,974		
		常任理事会（9/11）交通費	73,000		
		常任理事会（3/21）お茶代	4,584		
		常任理事会（3/21）交通費	83,000		
		小 計			
会報（2回分）	120,000	第1号会報印刷代	19,500	会員会費（一般） 306人 × @5,000円 5人 × @5,000円	1,530,000 25,000
		第2号会報印刷代	23,500		
		小 計			
会誌	450,000	小 計		(18年度分)	
			0	会員会費（学生）	
通信・連絡費	400,000	宅急便他運賃料金	115,523	8人 × @2,000円	16,000
		郵送料	670		
		小 計			
第2回大会運営補助費	150,000	小 計		銀行利息	6
			0		
各種委員会費	80,000	運営委員会費	20,000		
		企画委員会費	20,000		
		研究委員会費	20,000		
		機関誌発行委員会費	49,360		
		小 計		109,360	
研究調査費	100,000	研究調査費	100,000		
		小計		100,000	
名簿作成費	200,000	会員名簿印刷代	71,400		
		小計		71,400	
事務局経費	540,000	アルバイト代	120,000		
		振込手数料	525		
		事務用品	75		
		ホームページ管理費	100,000		
		封筒印刷代	15,540		
		小計		236,140	
		支出合計	902,426		
		平成18年度へ繰越金	1,568,580		
合 計	2,310,000	合 計	2,471,006	合 計	2,471,006

平成18年度事業計画

平成18年	
6月30日	学会報第3号発行(第3回大会一次案内)
9月10日	常任理事会(大阪教育大学天王寺キャンパス)
10月16日	学会報第4号発行(第3回大会二次案内)
11月18日~19日	第3回大会(総会、理事会)
12月	学会報第5号発行
平成19年	
3月	学会誌第2号発行

平成18年度予算

収入の部		
会員会費	1,280,000	(320人×0.8×@5,000)
法人会員会費	1,000,000	(20社)
平成17年度繰越金	1,568,580	
合計	3,848,580	
支出の部		
会議費	300,000	(17年度分と18年度分)
会報(3回分)	70,000	
会誌	1,000,000	
通信・連絡費	400,000	
大会運営補助費	150,000	
各種委員会	220,000	
研究調査費	200,000	
事務局経費	380,000	
予備費	1,128,580	
合計	3,848,580	

地区支部の活動

四国地区

11月11日、香川県高松市において、第3回四国地区集会が行われた。四国地域の小中高校の教員や大学教員、新聞社の担当者ら約30人が参加した。今回は、「生き方指導とNIE」をテーマにシンポジウムが行われた。登壇した本学会員である光洋中学校の前野教諭は、自殺した中学生が残した遺書を掲載した新聞を題材に、生徒が感想をまとめた道徳の授業の実践を提案した。ここでは「遺書掲載の是非論」の討議があり、新聞に一定以上の価値や信頼があることにより掲載の意味があった、あるいは連鎖の原因になった可能性も否めないといった“賛否”の意見が出た。記事の教材化には、「メディア側も現象を書くだけで終わらず、記事を取り上げたNIEの授業そのものを取材して記事化するなど、一緒になって考える双方向性を大事にしていきたい」といったマスコミ側からの意見も貴重であった。

(香川大学教育学部 阪根健二)

近畿地区：日本NIE学会近畿支部結成

去る8月25日、日本NIE学会近畿支部結成の世話人会が大阪教育大学天王寺キャンパスで開かれ、発会式を兼ねたセミナーを次の日程で行うことが決まりました。

日 時 平成19年3月21日午後
場 所 大阪教育大学天王寺キャンパス
内 容 シンポジウムと研究発表

なお、近畿地方に在住の会員には後ほどご案内を差し上げます。

(京都教育大学 平石隆敏)

会報ニュース

事務局から

1. 第4回学会開催地決定

去る11月18日のNIE学会総会において次回(第4回)学会開催地は広島大学と決定しました。日程はまだ不確実なところもありますが、11月17日(土)、18日(日)を予定しています。

2. 会員名簿の発行について

2006年1月1日に現行の会員名簿を発行いたしまして、次回は2年後とさせていただきますが、まだ若い学会でかなりの会員の増加がありました。そこで2007年4月1日現在で会員名簿を作成いたします。

つきましては、発会以後まだ1度も学会費の納入のない方は至急お納めください。また、住所、連絡先が変わられた方は事務局までご連絡くださるようお願いいたします。

3. 会報編集担当より

今回、会報編集作業に手間取りまして、会報5号の発行が大幅に遅れてしまいました。また大会内容の一部に報告が掲載されていないものがあります。不手際を深くお詫びいたします。

(会報編集担当 平石隆敏)

4. 会報編集担当より：Web版の追記

お手元にお届けした会報5号では、上記のように大会内容の一部に掲載できなかった部分がありましたが、このWeb版の会報では、その箇所の報告（自由研究発表第二会場）も含めた完全版を掲載させていただきました。なお紙媒体の会報としては、6号に該当部分を掲載させていただく予定です。

よろしくご理解のほど、お願い申し上げます。 （会報編集担当 平石隆敏）